

1. 人権が尊重され、誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり
2. 良好な環境が整った、快適で安全・安心なまちづくり
3. 活力ある産業に満ちた、にぎわいあふれるまちづくり
4. 明日の彦根市を担う人を育(はくく)むまちづくり
5. 人とひととの交流をひろげ、市民文化を創造するまちづくり

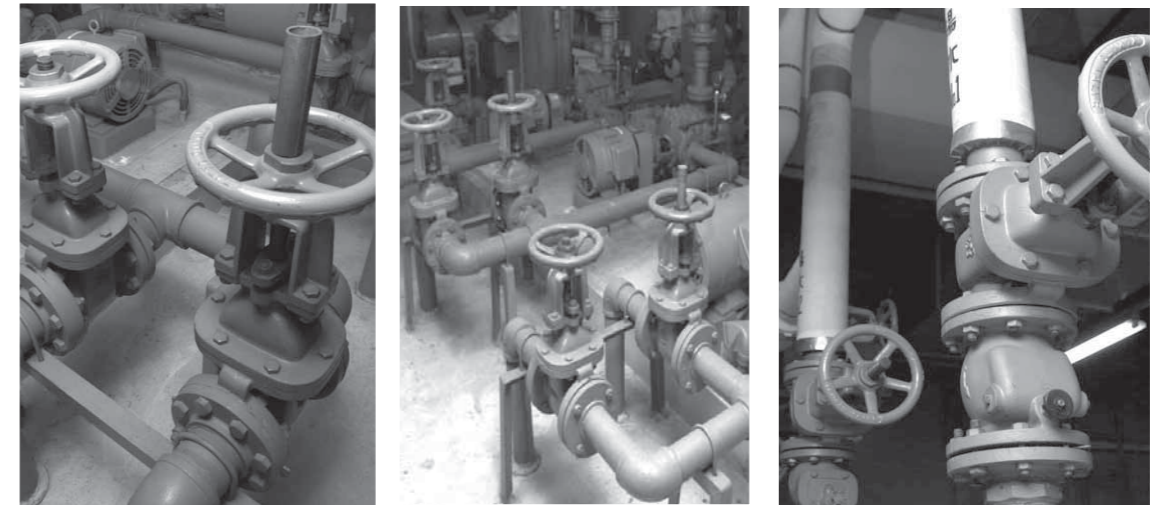
彦根の地場産業 バルブの魅力に迫る

特集

バルブの生産地



滋賀県下最大の集積地



▲彦根市役所で使用されているバルブ

彦根にある理由とは

一人の職人の存在

物語は、ある一人の職人から始まります。名前は、門野留吉です。幼少のころから京都の銕金具師のもとへ行き、かんざしなどの装飾品を作り、金属を加工する技術を学びました。彦根の上魚屋町(現在の本町)に住んでいた人の養子になり、彦根で新たに開業しました。明治時代の中ごろには、弟子を多数抱えていました。

そんな門野留吉に大きな出会いがありました。一説によると、製糸工場を経営している人が、繭から糸を取り出すために必要な設備としてカラン(オランダ語で蛇口)を買いに神戸に行く途中、門野留吉にカランの製造を勧めたというものです。

また、別の説では、製糸工場にカ

ランを納入していた問屋に、カランの製造を勧められて作り始めたとも伝わっています。門野留吉は、この時期の出会いによってカランを作り始めたようです。

2銕金具、金、銀、銅などを使って作る仏壇などを装飾する金具

仏壇と繊維との関係

当時の明治政府は、産業の振興策として繊維業に力を入れていたときでした。富岡製糸場(群馬県)を始め、日本各地で繊維業の会社ができ、工場で作られる糸は、蚕がつくる繭を湯につけてほぐし、糸を紡ぐ機械を使用して作っていました。この湯の調整にカランが使われていたのです。

彦根でも養蚕業が盛んになり始めた時期で、空地に蚕の餌となる桑を植えたり、養蚕をする所が増えたりしていきました。こうして繊維業が発展していく過程で、カランの需要はますます、高まりました。

もともとあった彦根の地場産業である、仏具を作製するような高度で精密な技術と、繊維業との深い関係のなかで、彦根のバルブは、その産声をあげていったといえそうです。

明治20年代の後半には、国内で水道の整備が盛んになり、問屋からバルブなどの作製の指導を受け、技術を磨いていくと、多くの受注の依頼がくるようになりました。

門野留吉は、弟子の指導に大変熱心で、多くの優秀な技術者が彼のもとから育っていきました。そして、独立していった技術者集団が彦根を中心に周辺地域に固まってできました。また、彦根には金属を溶かして釣鐘などをつくる、銕物の技術者がいました。その人たちもバルブ製造へ加わり始め、彦根で開業しました。その結果、彦根は「バルブの一大生産地」になっていきました。

個別受注にも対応

バルブは規格化されると大量生産に適しています。しかし、明治時代には、大きさなどは、それぞれの場所に合わせた特殊なバルブを用いていました。さらに、バルブは劣化すると、部品を取り替える必要があります。

彦根では産業が集積していたため、特殊で少量の部品を受注することができました。そのことが産地としての信頼につながり、彦根バルブの強みになっていったのです。

彦根市には、伝統的な地場産業として、ファンデーション(下着)、バルブ、仏壇の3つの産業があります。これらの3つの産業は、彦根市の発展に大きく寄与してきました。

そのなかで、彦根で作られるバルブは、水道用、工場などで使用される産業用、船用が主に製造されています。

彦根のバルブは、明治時代からその変遷をみることでできます。それは、ある一人の職人と大きな関係があります。

今回は、彦根市の地場産業から「バルブ」について、お伝えします。彦根でバルブが発展してきた歴史をさかのぼり、現在バルブ産業で起きている新たな取組を紹介します。

1 地場産業 地元資本による中小企業が一定の地域に集中的に立地している産業

問い合わせ先

バルブに関して 滋賀バルブ協同組合(岡町) ☎22・4873番、FAX22・0463番

地場産業の振興に関して 商工課 ☎30・6119番 FAX22・1398番

彦根に残る門野留吉を訪ねて

門野留吉を顕彰する碑が、明性寺(本町3丁目)にあります。お寺の入口から入ってすぐ左手の庭の奥に、見上げるほどの大きな石碑があります。

この石碑は、門野留吉を慕う弟子たちによって、昭和の初期に建てられました。門野留吉は、弟子たちの指導にも大変熱心だったそうです。



明性寺にある門野留吉を顕彰する碑